

# DEBETUBE 教育効果分析レポート

— フィルターバブル疑似体験型教材の授業実践より —

## 1. はじめに

本レポートは、スマートニュース メディア研究所と Classroom Adventure が共同開発した教材「DEBETUBE」を用いた授業実践の教育効果を分析・報告するものである。対象は高校生α組・β組（計80名）である。

DEBETUBE は、SNS 環境における情報の偏り（フィルターバブル）や多角的な視点の重要性を、疑似体験を通じて学ぶ教材である。生徒は動物園の存続という同一テーマに対して異なる切り口で制作された3種類の動画のいずれかをランダムに視聴し、コメント投稿やいいねを通じてリアルな SNS 環境を体感する。最終的にクラス全体の統計データを用いた振り返りとディスカッションを行い、批判的思考力や対話力の育成をめざすものである。

### 1.1 本レポートの目的

本レポートでは以下の2点を中心に分析を行う。

- 動画の視聴が生徒の意見形成にどの程度影響を与えるか
- 「動画のみ」と「動画+ディスカッション」とで、その影響の強さに違いがあるか

なお、本分析は学術論文としての統計的検定を目的とするものではなく、教員が DEBETUBE を授業で活用する際の参考となる、実践的な知見の提供を主眼としている。

## 2. 授業設計

### 2.1 使用教材（動画の種類）

DEBETUBE では、動物園の存続というテーマについて、制作意図の異なる3種類の動画が用意されており、生徒にはそのうちの1本がランダムに割り振られる。

動画の種類	タイトル・チャンネル名	特徴・トーン
雑学動画	【衝撃】動物園の衝撃事実3選 衝撃ファクト速報	ショート形式・センセーショナルな演出・AI音声

動画の種類	タイトル・チャンネル名	特徴・トーン
切り抜き動画	メイパパかわいそう！動物園で2時間待たされた...	切り抜き・感情訴求・特定人物の体験を中心に構成
ニュース動画	ゴリラの赤ちゃんマイルズくんが北九州の動物園で誕生【公式】SMART NEWS CH	ニュース報道形式・複数の視点を含む客観的な構成

## 2.2 クラス別の比較設計

意見変容の要因を「動画視聴」と「ディスカッション」に切り分けて検証するため、2クラスで授業フローを以下のように変えた。なお、両クラスの学力は平準化されている。

クラス	授業フロー	測定のねらい
α組	事前アンケート → 動画視聴 → 『意見確認』 → ディスカッション → 振り返り	動画視聴のみの効果を純粋に測定する
β組	事前アンケート → 動画視聴 → ディスカッション → 『意見確認』 → 振り返り	動画+ディスカッション後の変容を測定する

## 3. 分析① — 意見変容の結果

### 3.1 全体の傾向

事前アンケートの時点で、両クラス合わせて約 95% 以上の生徒が「動物園を運営してもいい（賛成）」と回答しており、そもそも反対意見を持つ生徒が非常に少ない状態から授業がスタートした。以下の図 1 は各動画グループの事前・事後の賛成者数を示したものである。

図1 意見変容の結果（事前→事後）

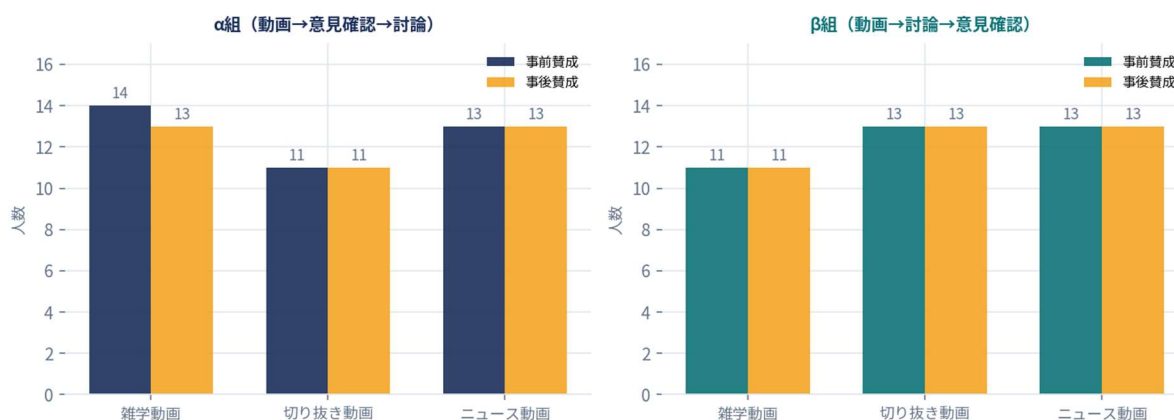


図1 動画グループ別 事前・事後の賛成者数比較

図 1 から明らかなように、全 80 名のうち意見が変容したのは 2~3 名（変容率 約 3%）に

とどまった。

クラス	動画の種類	事前 賛成	事前 反対	事後 賛成	事後 反対	意見変容
α組（討論前）	雑学動画	13	1	11	1	▼2（→「分からない」）
α組（討論前）	切り抜き動画	11	0	11	0	変化なし
α組（討論前）	ニュース動画	13	0	13	0	変化なし
β組（討論後）	雑学動画	11	0	11	0	変化なし
β組（討論後）	切り抜き動画	13	0	13	0	変化なし
β組（討論後）	ニュース動画	11	2	12	1	▲1（反対→賛成）

### 3.2 意見が変わらなかった理由の考察

変容率が低かった背景には、以下の3つの要因が複合的に働いていたと考えられる。

#### (1) 動画への批判的な見方の強さ

アンケートの自由記述を見ると、多くの生徒が動画そのものに対して批判的・懐疑的な目を持っていた。特に雑学動画や切り抜き動画に対しては、以下のようなコメントが複数見られた。

「ショート動画でこれを訴える時点で胡散臭い。信憑性が低く、この程度では意見は変わらない」

「AIみたいで信憑性がなかった」「ソースが3つしかない。専門家でもない人の発信は信用しにくい」

これは教育的には望ましい反応であるが、同時に動画が「意見を動かすメディア」として機能しにくかったことを意味する。

#### (2) 既存の信念の強さ（天井効果）

事前から「動物園賛成」が95%以上を占めており、意見が変容するにはまず「反対方向への引力」が必要だが、その余地が統計的にほとんどなかった。「動物園に反対する理由がそもそも見当たらない」という生徒が多く、どの動画を見ても変わりようがない状態（天井

効果)が生じていた可能性が高い。

### (3) 動画タイプによる影響の差

唯一変容が確認されたのは、 $\alpha$ 組の雑学動画グループで2名が「賛成」から「分からない」へ移行したケースである。これは雑学動画が「動物の寿命が短くなる」など動物園の問題点を感情的に打ち出す形式であったためと考えられる。ただし「反対」への変容には至っておらず、あくまで「揺らぎ」の段階に留まった。

## 4. 分析② — 動画の「影響度スコア」の分析

### 4.1 スコアの概要

アンケートでは、「動画やコメントに影響を受けたと感じるか」を1(全く影響なし)～5(大きく影響を受けた)の5段階で自己評価させた。クラスと動画タイプ別の平均値を図2に示す。

図2 動画視聴による影響度スコア (自己評価: 1~5)



図2 動画タイプ×クラス別の影響度スコア (自己評価平均、1~5)

いずれのグループも平均スコアは1.7~3.0と中央値(3.0)以下の水準にとどまっており、生徒の自己評価においても影響は「限定的」であったと言える。ただし動画タイプとクラスの組み合わせにより、いくつかの特徴的な差異が見られた。

## 4.2 各動画タイプの特徴

### 雑学動画の特徴

α組（討論前）で最も高いスコア（平均 2.4）を示した一方、β組（討論後）では 1.7 と最も低下した。これは、討論前の段階では動画の「衝撃的な見せ方」が注目を引くが、討論を経て「誇張・ソース不足」への批判が生じ、相対的な評価が下がるためと考えられる。

### 切り抜き動画の特徴

α・β 両組で 2.1~2.2 と安定した（低い）スコアを示した。「途中で話が切られている」「チャンネル信者向けの編集」といったコメントが散見され、生徒は切り抜きという形式そのものに対して信頼性の疑問を感じている様子であった。

### ニュース動画の特徴

α組では 1.9 と最も低いスコアだったが、β組（討論後）では 2.8 と最も高くなった。討論を通じて「ニュース的な客観視点」の価値を再認識した可能性が示唆される。生徒のコメントにも「賛成・反対両方の意見があり信憑性があった」「専門家コメントは信用できた」との記述が多く見られた。

【重要な発見】「影響を受けた」という感覚と「意見が変わった」は、必ずしも一致しない。生徒が影響を感じながらも既存の意見を維持する「批判的受容」のパターンが多く見られた。これは表面的な数値（変容率）だけでは見えにくい、重要な学習の形態である。

## 5. 分析③ — 生徒による動画の信頼性判断

「動画の情報について、信じてもいいと思ったポイント・怪しいと思ったポイントはどこか」という自由記述の回答から、生徒が動画の信頼性を判断する際の「判断基準」を分類した。

### 5.1 信頼できると感じた情報の特徴

- ・ 発信元が公式・ニュース機関である（SmartNews CH など）
- ・ 専門家・研究者のコメントが含まれている
- ・ 賛成・反対の複数の視点が提示されている
- ・ 具体的なデータや数字が根拠として示されている

「ニュース番組っぽいところ（発信元）が信頼の根拠になった」（β組・ニュース動画視聴者）

「専門家の方が言っていることは信じられた。何も根拠もなく一方の意見に偏ったものは怪しく感じた」（α組・切り抜き動画視聴者）

## 5.2 怪しいと感じた情報の特徴

- AI 合成音声・AI 生成画像の使用
- 誇張・センセーショナルな表現（「衝撃」「絶対に」等）
- 一方の立場しか取り上げない、情報の偏り
- ソース・出典が少ない、または示されていない
- 話が途中で切られている、文脈が不明

「AI みたいで信憑性がなかった。ショート動画でこれを訴える時点でそもそも胡散臭い」（α組・雑学動画視聴者）

「チャンネル信者向けに切り取っている可能性を考えると信用できない。話を途中で切っているところが怪しかった」（β組・切り抜き動画視聴者）

## 5.3 AI 生成コンテンツへの感度

特筆すべきは、AI 音声・AI 生成画像に対する生徒の感度の高さである。両クラスを通じて「AI かどうか」を信頼性の判断基準として挙げた生徒が複数いた。自由記述には「AI かどうかの判別が年々難しくなる」「AI の存在が情報判断をより難しくする」という現代的なリテラシー課題への言及も見られた。

これは現在の高校生がすでに AI 生成コンテンツを意識的に見分けようとしている表れであり、今後の授業設計において「AI リテラシー」を組み込む重要性を示唆している。

# 6. 分析④ — メディアリテラシー意識と教材評価

## 6.1 定量スコアの概要

授業後のアンケートでは、DEBETUBE への評価とメディアリテラシー意識について 1～5 の尺度で回答を求めた。図 3 に平均スコアを示す。

図3 生徒によるDEBETUBEの評価スコア（1～5）

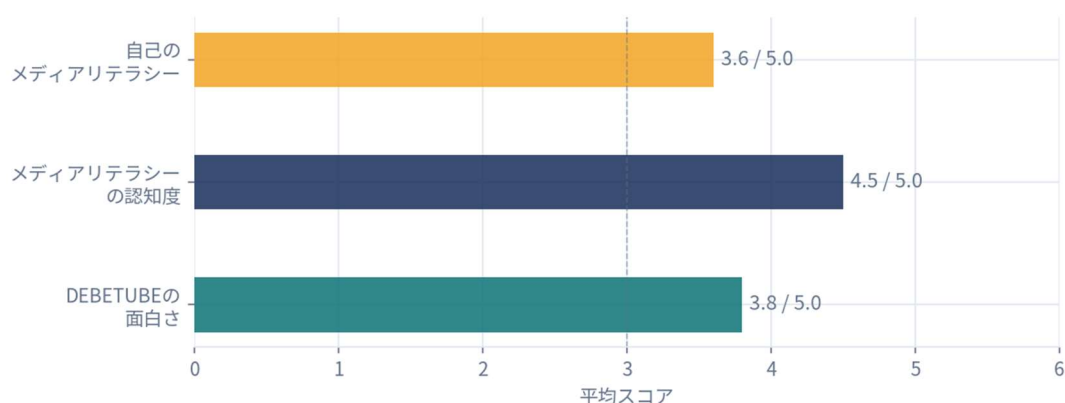


図3 DEBETUBE の評価・メディアリテラシー意識スコア（1～5）

設問	平均スコア	コメント
DEBETUBE を面白いと感じたか	3.8 / 5.0	両組平均。「面白かった」との感想が多い
メディアリテラシーという言葉を知っているか	4.5 / 5.0	認知度は高い。用語としてすでに浸透している
自分はメディアリテラシーがある方か	3.6 / 5.0	自己評価はやや高め。過信の可能性にも注意

## 6.2 生徒が重視した情報判断の基準

「情報を見る時に、どんな部分を重要視していたか」という自由記述を集計すると、以下のような傾向が見られた。

### よく見られた回答（多数）

#### ソース・出典元の確認

「その情報の発信元が信頼できる機関か」「ソースが明示されているか」を重視する回答が最多。

#### 誇張・偏りのなさ

「一方的でないか」「誇張しすぎていないか」を確認する習慣を持つ生徒が多い。

#### 発信者の専門性・信頼性

「専門家かどうか」「その分野の知識がある人の発信か」を判断基準にする生徒が多数。

### 注目される回答（新興の懸念）

#### AIかどうかの判別

「AI かどうかを判別することが重要になってきた」という認識を持つ生徒が複数おり、現代のリテラシー課題として意識されている。

#### 批判的思考（クリティカルシンキング）の実践

「常に情報を疑う」「鵜呑みにしない」を実践的な行動指針として述べる生徒も目立った。

## 7. 分析⑤ — 自由記述から見る学びの質

「授業の感想」および「情報があふれる中で気をつけるべきこと」の自由記述は、定量データでは捉えきれない学びの深さを示している。以下に4つのカテゴリに分類して整理する。

### A. 情報の「作られ方」への気づき（フィルターバブル理解）

この授業の最も重要な教育目標であるフィルターバブルの実感について、多くの生徒が自分の言葉で表現していた。

「一つの側面でしか物事を語っていない。別の側面から見られる動画の方が良い」 (α組)

「同じ動画を見ていると自分に都合のいい情報しか入ってこないことがよくわかった」

「真実・世論・自分の意見を分けて確立しておくことが大切」 (β組)

### B. 自分自身の判断力への内省（メタ認知の萌芽）

単なる「情報の受け取り方」の学習を超え、自分自身の認知傾向への気づきを示した回答が印象的であった。

「こういうタイプの動画は割と真に受けてしまうものだと思った」 (α組)

「自分がリテラシーあると思っていたが怪しいと感じた。嘘を嘘と見抜ける人になりたいと思えた」 (α組)

「普段の YouTube 視聴の際にも注意しようと思う」 (β組)

### C. AI・フェイクコンテンツへの新たな懸念

AI 生成コンテンツに関する懸念は、授業後の振り返りにおいて特に顕著に表れた。

「AI 動画のようにリアルかフェイクかわからない情報に対するリテラシーが今後必要」 (β組)

「AI かどうかの判別が年々難しくなっており、自分で信頼できる情報源から情報を得ることを意識すべき」 (β組)

## D. 情報収集行動の変容意識

授業後に具体的な行動変容への意欲を示した回答も見られた。これは教材が単なる知識伝達を超えた効果を持つことを示唆する。

「複数の情報源を確認し、客観的に判断したうえで自分なりの意見を少しは持つておくこと」 (β組)

「いろんなところ、立場から情報を集めるべき。一番いいのは論文を読むこと」 (β組)

## 8. まとめと教員向け示唆

### 8.1 本授業実践の総括

以下に主要な発見を整理する。

発見	内容
発見①	意見変容率は約 3% と極めて低く、動画単体では意見を変えにくい。ただし雑学動画視聴者に「分からない」への移行が見られ、「揺らぎ」の萌芽は確認された。
発見②	生徒は動画タイプの信頼性を直感的に判別しており、ニュース動画を最も信頼し、雑学・切り抜き動画を批判的に見る傾向があった。
発見③	「影響を受けた」感覚と「意見変容」は別物。影響を感じながらも既存の意見を維持する「批判的受容」が多数見られた。
発見④	AI 生成コンテンツへの感度が高く、現代的なリテラシー課題として生徒に認識されている。
発見⑤	自由記述では、フィルターバブルへの気づき・メタ認知・行動変容意欲など、高次の学びの萌芽が多数確認された。

以上を踏まえると、DEBETUBE の教育効果は「意見変容（態度変容）」ではなく、「情報に対する批判的思考力の言語化・自覚化」に本質的な価値があると結論づけられる。

## 8.2 教員向けの実践的示唆

### (1) テーマ選びが教育効果に直結する

今回の「動物園の存続」というテーマは、事前から賛成が 95% 以上を占めており、賛否が拮抗しにくい設定であった。意見変容や活発なディスカッションをねらうのであれば、事前アンケートで賛否が 5:5 に近くなることが期待されるテーマを追加することも検討したい。

### (2) α組（討論前意見確認）方式を推奨する

動画視聴後すぐに意見を確認し、その後討論を行う α組方式のほうが、動画の影響を純粹に測定できる。また生徒自身も「動画によって意見が揺らいだかどうか」を自覚しやすく、振り返りの質が高まる可能性がある。

### (3) 振り返りの時間を最重要視する

本実践を通じて、定量的な意見変容よりも自由記述に豊かな学びが現れた。「なぜその情報を信じた（信じなかった）か」をクラス全体で共有し、異なる動画を見た生徒同士が感想を比べる時間こそが、フィルターバブルの実体験につながる最重要のフェーズである。

### (4) AI・フェイク問題と組み合わせる

生徒の AI 生成コンテンツへの関心は高く、すでに日常の情報接触においても意識されている。DEBETUBE の授業を「AI リテラシー」の単元と組み合わせることで、現代のメディア環境に適した包括的なリテラシー教育が実現できる。

### (5) DEBETUBE でできること・できないことを理解して使う

#### できること（強み）

- SNS 環境を模した疑似体験によるエンゲージメントの向上
- 同一テーマに対して異なる切り口の動画を比較することで、情報の「作られ方」を実感させる
- 「なぜその情報を信じたか」を言語化させる機会を与える
- クラス全体の統計データを使った振り返りで、フィルターバブルを可視化できる

#### 期待しにくいこと（限界）

- 短時間の授業での意見変容（態度変容）
- 賛否が偏りやすいテーマでの活発な討論
- 動画の信憑性批判が強い生徒層での情報影響力の発揮

## 参考

本レポートのデータは、授業後に生徒が回答したアンケート（α組 38 名・β組 42 名）お

よび実施レポートに基づく。サンプルが少ないため、分析には限界があることに留意が必要である。また、影響度スコアの平均値については回答漏れを除いた有効回答を集計した概算値を使用している。